拓殖大学草創期の群像

拓殖大学国際日本文化研究所
長谷部　茂

2024年2月10日　ZOOM

拓殖大学草創期略年表Ⅰ（1895～1903）

1895（明治28）年	4月	日清戦争勝利　日清講和条約により　台湾領有
1898（明治31）年	4月	台湾協会発足 初代会頭桂太郎
1989（明治32）年	8月	私立学校令公布
1900（明治33）年	6月	26日　台湾協会学校設立認可　初代校長桂太郎
	9月	新入生100名入学許可　仮開校式、授業開始（17日）
1901（明治34）年	4月	台湾総督府補助金（年額1万円）交付開始
	10月	茗荷谷校舎落成
	12月	寄宿舎（南・北寮）落成
1902（明治35）年	6月	第一次桂太郎内閣組閣
1903（明治36）年	3月	専門学校令公布
	7月	11日　台湾協会学校第１回卒業式（卒業生45名）

拓殖大学草創期略年表Ⅱ（1904～1914）

1904（明治37）年	2月		日露戦争勃発　日露戦争従軍通訳96名―うち7名戦死
	4月		台湾協会専門学校と改称
1905（明治38）年	9月		日露戦争終結。ポーツマス条約調印
1907（明治40）年	2月		東洋協会専門学校と改称
同　年	5月		朝鮮地方金融組合発足
同　年	10月		京城（ソウル）分校設置
1912（明治45）年	4月		明治天皇より恩賜金拝受
同　年	7月		明治天皇崩御　大正に改元
同　年	9月		桂校長辞任　小松原英太郎、第2代校長就任
1914（大正3）年	3月	15日	恩賜記念講堂完成（総工費2万7409円96銭）
	7月		東洋協会、社団法人となる。第一次世界大戦勃発
	11月	2日	恩賜記念講堂開館式・故桂公銅像除幕式挙行

拓殖大学草創期略年表　Ⅲ（1915～1919）

1915（大正4）年	8月	東洋協会植民専門学校と改称
1917（大正6）年	4月	新渡戸稲造第2代学監就任
	12月	拓殖大学（専門学校令による）と改称
1918（大正7）年	4月	大学部予科設置。修業年限予科１年・本科３年となる。 京城分校、本校から独立して東洋協会京城専門学校となる。
	12月	大学令公布（勅令第388号）
1919（大正8）年	2月	後藤東洋協会会長、三代学長就任。永田秀次郎幹事就任
同　年	4月	国際連盟発足にあたり日本提案の人種差別撤廃条項却下
1919（大正8）年	11月	第一次世界大戦終結 3日　校歌制定（宮原民平作詞・永井建子作曲）、創立二十周年記念陸上大運動会で披露

校名改称

私立学校：台湾協会学校（1900）

専門学校：台湾協会専門学校（1904年）
東洋協会専門学校（1907年）
東洋協会植民専門学校（1915年）
拓殖大学①（1917年）

旧制大学：東洋協会大学（1922年）
拓殖大学②（1926年）
紅陵大学（1946年）

新制大学：紅陵大学（1949年）
拓殖大学③（1953年）～

（校名７種、変更９回）

1、ＮＧＯ（協会）事業の一つとして設立・経営された学校

2、海外（外地）で働く人材養成のための学校

3、卒業生の海外勤務を義務づけていた学校

4、海外勤務に特化した学科課程をもつ語学学校のような学校

5、台湾総督府（外地行政機関）の認可を必要とした学校

6、全寮制。教職員・学生・卒業生間に一体感のある学校

●台湾協会設立主意書

台湾わが版図に帰せしより列国はすなわち環眼凝視し、国民はすなわち憂慮尽瘁し、一世の耳目靡然として此土に集まれり。（中略）言語の通せざる、礼俗の同じからざる、飲食、嗜好、常習の趣を異にする、今なお旧のごとくにして、さながらこれ異邦の民なり（中略）

天下同憂の士、想うに必ず多からん。望むらくは恵然和来し、力をあわせて功を積み、台湾三百万衆のために、我が新政の沢に浴し、文明の効果を楽ましめ（中略）請う来り和して斯の大業を完うせしめよ。

●台湾協会規約

第一条　本会ハ台湾ニ関スル諸般ノ事項ヲ講究シ台湾ノ経営ヲ裨補スル以テ目的トス。

第二条　本会ノ為サント欲スル事業ハ約左ノ如シ。

一、台湾ノ真相ヲ闡発スル事、附視察員ノ派遣

二、台湾ノ産業品及ビ台湾人民ノ嗜好ニ適スル本邦商品ヲ蒐集スル事

三、台湾ニ移住シ又台湾ヨリ上游スル者ノ為メニ及ブ限リ便利ヲ与フル事

四、台湾ニ関スル実業上ノ調査、紹介等ノ依頼ニ応ズル事

五、彼我言語練習ノ便ヲ図ル事

六、台湾会館ヲ設立スル事

七、会報

八、講談会

九、台湾留学生ヲ監督補助スル事

十、台湾ニ関スル左ノ書藉ノ蒐集（但海外各植民地ニ関スルモノヲモ集ム）

一通信、二新聞、三雑誌、四著述、五旧記

1、NGO（協会）事業の一つとして設立・経営された学校

●台湾協会学校設立趣意書

……曩に我輩微力自ら揣らず奮て台湾協会を設立し台湾の為に未だ加へられざる国民の務を加へて該島の経営に少裨補あらんことを希ふや天下同憂の士恵然和来し現に若干の基本金を備へ幾千の会員を有するに至れり。今や幸にして会務略々緒に就きたるを以て茲に台湾協会学校を設立し専ら新領土経営に要する往邁敢為の人材を養成し彼我の交情を潤和便安ならしめ以て殖産興業の発展を裨補し聊か台湾の将来に貢献する所あらんことを期す。

●台湾協会学校規則（学則）

第一条　本校ハ台湾及南清地方ニ於テ公私ノ業務ニ従事スルニ必要ナル学術ヲ授クルヲ以テ目的トス。

第二条　修業年限ヲ三ケ年トス。

第三条　本校ニ行政科、実業科ヲ設ク。

※行政科、実業科の別は明治36年度に廃止

第一条の変遷

明治40年「台湾清国及韓国」

大正４年「台湾、朝鮮及ビ支那其ノ他南洋」

大正11年（大学昇格後）「商業及殖民ニ関スル学術ヲ教授シ並其蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トス」

●台湾協会学校規則（学則）

第十条　入学ヲ許可セラレタル者ハ在学証書ニ所定ノ記入ヲナシ二名ノ保証人連署ノ上差出スヘシ

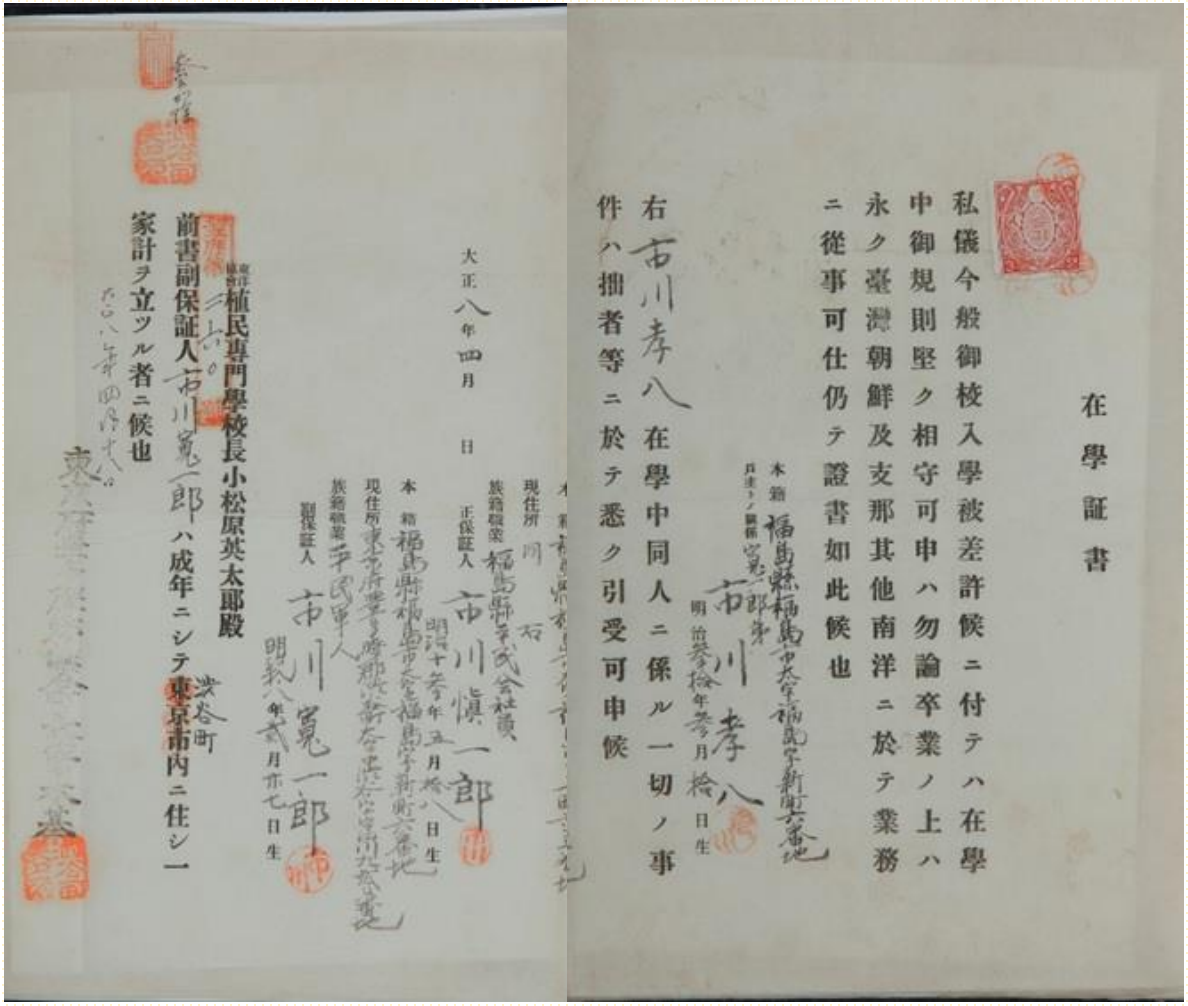
在学証書（書式）

私儀今般御校入学被差許候ニ付テハ在学中御規則堅ク相守可申ハ勿論卒業ノ上ハ永ク台湾及南清地方ニ於テ業務ニ従事可仕候依テ証書如此候也

年　月　日　　族籍　　住所

氏名（印）

在学証書（大正八年）



在學証書

私儀今般御校入學被差許候ニ付テハ在學中御規則堅ク相守可申ハ勿論卒業ノ上ハ永ク臺灣朝鮮及支那其他南洋ニ於テ業務ニ從事可仕仍テ證書如此候也

本籍 福島縣福島市大字福島字新町六番地
戸主ノ續柄 家長 市川孝八
明治拾壱年拾壱月拾日生

右 市川孝八 在學中同人ニ係ル一切ノ事件ハ拙者等ニ於テ悉ク引受可申候

大正八年四月 日

現住所 同 右
族籍職業 福島縣平民 会社員
正保証人 市川慎一郎
明治十壱年五月拾八日生

本籍 福島縣福島市大字福島字新町六番地
現住所 東京府豊多摩郡渋谷町字道玄坂
族籍職業 平民 軍人
別保証人 市川寛一郎
明治拾八年弐月廿七日生

植民專門學校長小松原英太郎殿

前書副保証人 市川寛一郎ハ成年ニシテ東京市渋谷町内ニ住シ一家計ヲ立ツル者ニ候也

4、海外勤務に特化した学科課程をもつ語学学校のような学校

明治３７年度学科課程

学科課程表	第一学年 毎週	第二学年 毎週	第三学年 毎週
	台湾語 十二	台湾語 十二	台湾語 十二
	支那語 十二	支那語 十二	及支那語 十四
	法学通論 二	英語 六	英語 四
	英語 七	統計学 二	商法 二
	経済学 二	経済学 二	民法 二
	（亜細亜民族史 亜細亜近世史） 二	植民論 二	財政学 二
	商業地理 二	民法 二	国法学（行政法） 二
	簿記 二	簿記 二	国際法 一
	数学 一	数学 一	経済学 三
	商品学 二	国法学（憲法） 一	税関倉庫 一
		商事要項 二	

右課目中商品学、商事要項、税関倉庫ハ時宜ニヨリ之ヲ欠クコトアルベシ

設置時（明治３３年）学科課程

第一学年 毎週	第二学年 毎週	第三学年 毎週	
台湾語 五	台湾語 七	台湾語 四	実業科 毎週
支那官話 五	支那官話 五	支那官話 三	支那官話 四
法学通論 一	英語 五	英語 四	英語 六
英語 六	簿記 一	行政科 毎週	簿記 二
簿記 二	刑法 一	簿記 一	統計学 一
経済学 二	商法 一	統計学 二	農政学 一
統計学 二	民法 二	商法 二	財政学 一
亜細亜史 一	経済学 二	民法 二	商工経済学 二
商業地理 一	植民論 一	植民論 二	財政学 一
簿記 二	商法 一	財政学 二	統計学 一
数学 二	民法 一	統計学 一	数学 一
		行政法 一	
		憲法及国際法 一	

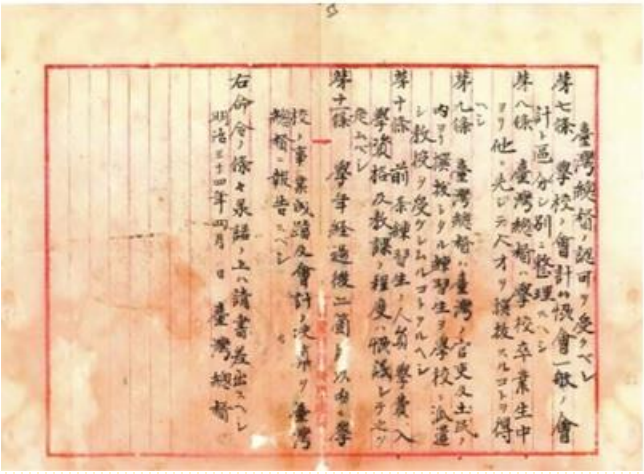
5、台湾総督府（外地行政機関）の認可を必要とした学校

●台湾総督命令書（抜粋）

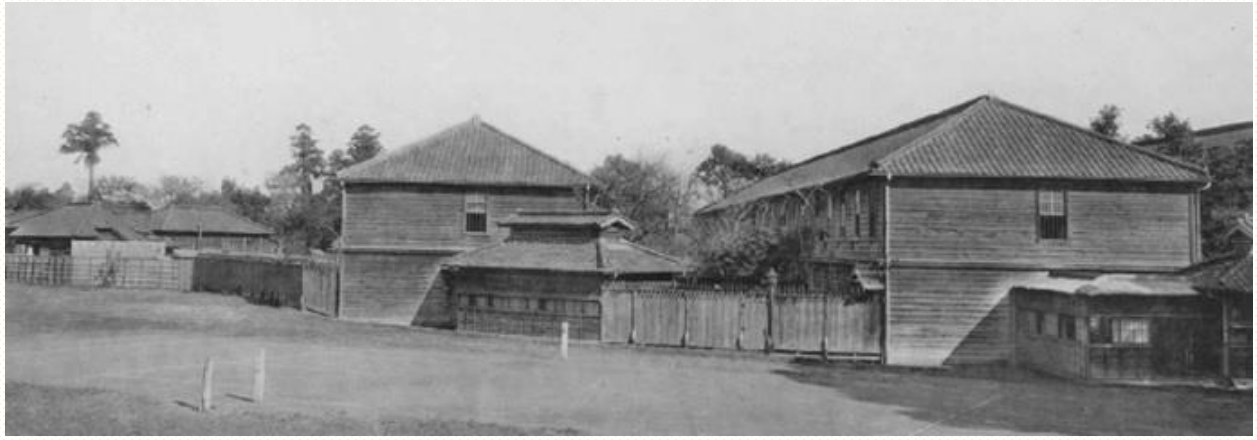
第一条　学校ノ教課及校則ノ制定変更及生徒人員ノ最小限ハ台湾総督ノ認可ヲ受クベシ

第四条　校長及学校会計主任ノ任免ハ台湾総　督ノ認可ヲ受クベシ

第八条　台湾総督ハ学校卒業生中ヨリ他ニ先ジテ人才ヲ撰抜スルコトヲ得ベシ



台湾総督府の補助金で建てられた校舎（上）と寄宿舎（下）



6、全寮制。教職員・学生・卒業生間に一体感のある学校

第1148號

一年生

積本二万部

金弐百五十三錢但十月分自一日至十日

内 金壱百五十三錢 賄費

金壱圓 舎費

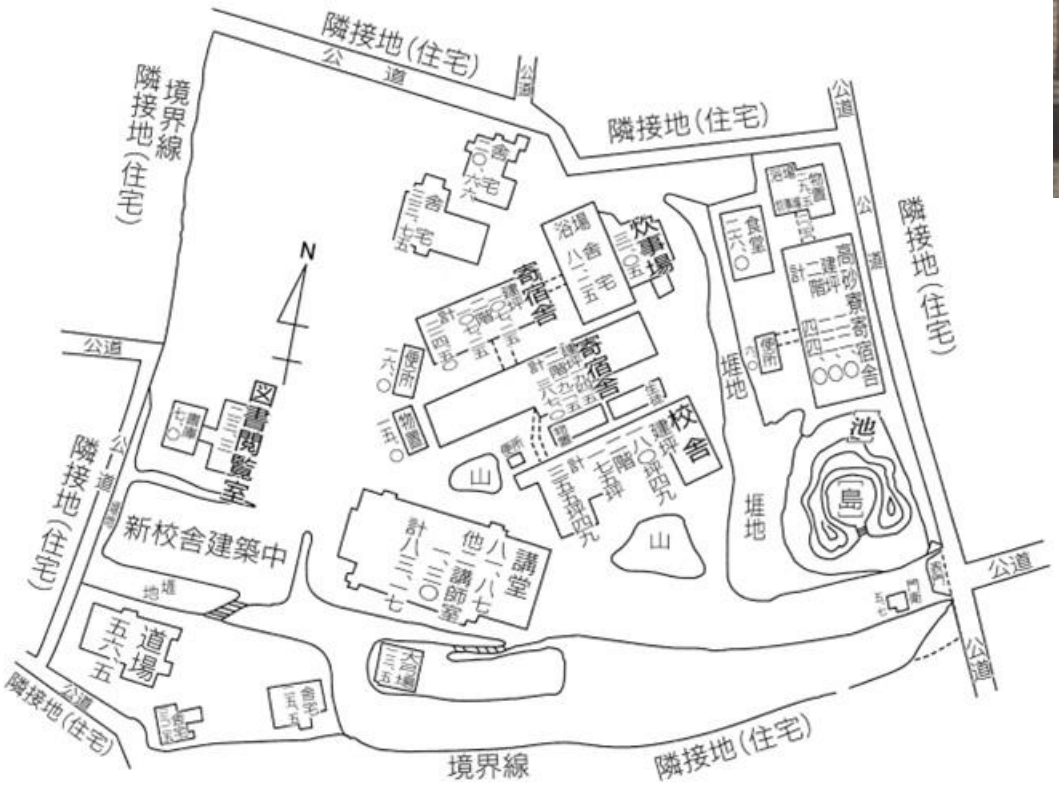
明治廿五年十月分 寄宿諸費領收之證

私立 臺灣協會學校

寄宿諸費領収

寄宿舎内部

校地・校舎（大正8年当時）



校地、校舎、寄宿舎

麗　澤　湖

台湾協会初代会頭
台湾協会学校初代
校長

１８４８（弘化　４）年１１月	長州萩に生まれる。幼名寿熊
１８６４（元治　元）年　７月	四国連合艦隊下関砲撃。小隊司令として警備
１８６８（明治　元）年	第四大隊第二中隊司令官として奥州を転戦
１８７０（明治　３）年　８月	ドイツ留学。軍事学を学ぶ。
１８７４（明治　７）年　１月	帰国後、陸軍歩兵大尉任官
１８７５（明治　８）年　６月	ドイツ公使館附武官として再びドイツに、軍事　行政学を学ぶ
１８７８（明治１１）年１２月	帰国後、陸軍中佐任官、管西局長就任
１８９０（明治２３）年　３月	陸軍省軍務局初代局長就任。陸軍次官兼任
１８９１（明治２４）年　６月	第三師団長として名古屋へ
１８９４（明治２７）年　９月	日清戦争従軍
１８９６（明治２９）年　６月	台湾総督就任。台湾・南清地方視察
１８９８（明治３１）年　１月	陸軍大臣就任
７月	台湾協会会頭就任
１９００（明治３３）年　６月	台湾協会学校（現拓殖大学）初代校長就任
１９０１（明治３４）年　６月	内閣総理大臣就任、第一次桂内閣成立
１９０３（明治３６）年	日英同盟協約調印
１９０４（明治３７）年　２月	日露開戦。勝利に導く。
１９０５（明治３８）年　９月	日露講和条約締結
１９０８（明治４１）年　３月	第二次桂内閣成立、大蔵大臣兼任
１９１０（明治４３）年　８月	韓国併合に関する日韓条約調印
１９１１（明治４４）年　４月	公爵に陞爵
１９１２（明治４５）年　７月	ヨーロッパに向け出発。天皇大患によりペテルブルクから引き返す。
７月	３０日、明治天皇崩御。内大臣兼侍従長就任
１９１２（大正　元）年１２月	第三次桂内閣成立、外相兼任
１９１３（大正　２）年１０月	１０日、薨去

●桂太郎校長　仮開校式告辞

校長として余が生徒諸子に切望する所は本校の以上の如き主旨を以て設立せられたる以上は此校の生徒諸子は能く此意を体して卒業の後は台地若しくは南清に於て飽迄諸般の事業に従事するの志望を堅固にして必要な学問智識を養成すると同時に極めて其体格を壮健にするの心掛なかるべからず。

……内地と異りて外人の間に立ちて日本人として従事する以上は一は以て我邦の紳士として我校の出身者たる体面を保ちて可恥挙動なき様……

●桂太郎校長　明治三十五年九月始業式訓辞

本校学生は何れも入校の始に於て決心し入校したるが如く、卒業後は内地に於て職業を執るに非ずして、台湾の事業に従事する者なれば、其学科も最も時事に適切なる者を授くる次第にて、修業の間に於ても其心を以て勉強すべく、又衛生にも注意し卒業後台地の就業に耐ゆることを期せざるべからず。又本校育英の目的は、豪傑を造くるに非ずして、能く人の手足と為り機関と為るべき適材を造くるにあれば、各自此辺に付ても平生能く心得て、十分奮発せられんことを望む

●建学の理念・精神

台湾協会学校設立趣意書

「専ら新領土経営に要する往邁敢為の人材を養成し彼我の交情を潤和便安ならしめ以て殖産興業の発展を裨補し聊か台湾の将来に貢献する所あらんことを期す」

仮開校式における桂校長訓示

「卒業の後は台地若しくは南清に於て飽迄諸般の事業に従事するの志望を堅固にし」「学問智識を養成」し、「極めて其の体格を壮健にする」「内地と異りて外人の間に立ちて日本人として従事する以上は一は以て我邦の紳士として我校の出身者たる体面を保ちて可恥挙動なき様」

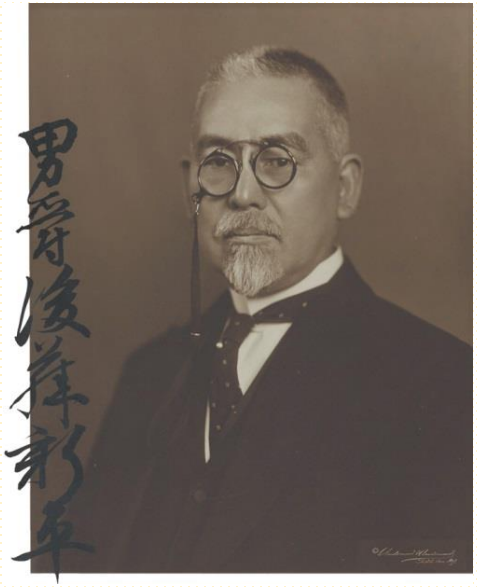
明治三十五年始業式における桂校長訓示

「又本校育英の目的は、豪傑を造くるに非ずして、能く人の手足と為り機関と為るべき適材を造くるにあれば、各自此辺に付ても平生能く心得て、十分奮発せられんことを望む」

積極進取の気概とあらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた有為な人材の育成

（『拓殖大学六十年史』矢部貞治第十代総長序文）

安政４年（1857）	６月４日　岩手県水沢市に生まれる
明治９年(1876)	須賀川医学校卒業　愛知病院医師
明治１４年(1881)	愛知医学校長兼病院長
明治１６年(1883)	内務省衛生局勤務
明治２３年(1890)	ドイツ留学
明治２５年(1892)	帰国　内務省衛生局長
明治３１年(1898)	３月台湾総督府民政局長（～３９年１１月）
明治３９年(1906)	満鉄総裁
明治４１年(1908)	桂内閣逓信大臣　鉄道院総裁
大正　５年(1916)	寺内内閣内務大臣兼鉄道院総裁
大正　７年(1918)	外務大臣
大正　８年(1919)	２月２４日拓殖大学長就任（～逝去まで）
大正　９年(1920)	１２月東京市長（１２年４月まで）
大正１１年(1920)	４月少年団（ボーイスカウト）日本連盟総長に就任
大正１２年(1923)	９月内務大臣、帝都復興院総裁（１３年１月まで）
大正１３年(1924)	１０月社団法人東京放送協会（ＮＨＫの前身）初代総裁に就任
昭和　４年(1929)	１月　拓殖大学恩賜講堂で陞爵祝賀会（伯爵に）
	３月２８日　昭和３年度拓殖大学卒業式にて最後の訓示
	４月１３日京都で逝去。享年７３
	４月１４日　本学学生３００名、棺を東京駅へ出迎える
	４月１６日　青山斎場にて葬儀執行



台湾総督府民政長官
３代学長　後藤新平

●後藤新平台湾総督府民政長官

（明治34年１月17日「台湾協会学校学生諸君に告ぐ」）

……一番至難なことは即ち此帝国の領土経営に適当なる人を得ると云ふこと……此の学校は一寸見ると云ふと変則の学校であって……此の学校なかりせば……独り台湾のみならず帝国拓殖事業、即ち殖民事業と云ふ者が成立ち或は成効すべき目的はないと申しても決して誣言ではない。

台湾協会学校創立委員（三四人）

朝比奈知泉（１８６２年～１９３９年）
文久２年水戸藩士の家に生まれる。新聞人。茨城師範学校を卒業して小学校訓導をした後、上京し、帝国大学に学んだが、在学中に山県有朋の後援で創刊された東京新報主筆となり中退。政党否定・議会攻撃の論陣を張り、大隈重信の条約改正に反対した。伊東巳代治が東京日日新聞（現毎日新聞東京本社）を買収して社長に就任すると、その編集主幹に迎えられる。東京日日が伊東の手を離れると退社して第一線を退いた。
昭和１４年７８歳で没。

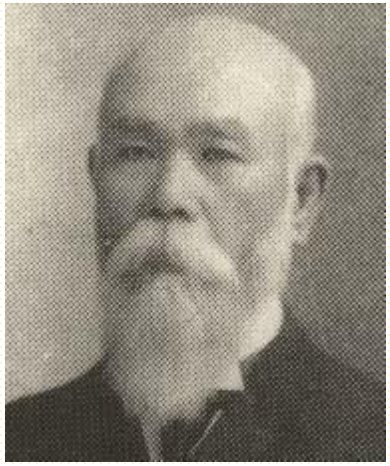
伊沢修二（１８５１年～１９１７年）
嘉永４年信濃国高遠藩士の家に生まれる。愛知師範学校長（現愛知教育大学）、東京師範学校長（現東京学芸大学）、音楽取調所長、文部省編輯局長、初代東京音楽学校長（現東京芸術大学）、東京盲唖学校長（現筑波大学附属盲学校）、初代台湾総督府民政局学務部長、貴族院議員、高等教育会議議員、東京高等師範学校長（現筑波大学）などを歴任。台湾における近代教育行政の基礎を作った。後の台湾総督伊沢多喜男は末弟。
大正６年６７歳で没。

井上角五郎（１８６０年～１９３８年）
万延元年備後国生まれ。福沢諭吉邸に住み込んで慶應義塾へ通い、後藤象二郎の知遇も得る。明治１６年朝鮮政府外衙門顧問。２０年帰国して後藤の大同団結運動に参加し、２３年第１回衆議院議員総選挙補欠選挙で当選以来、１４回連続当選した。２６年北海道炭礦鉄道理事に就任して実業界入りし、日本製鋼所を起こして会長となるなど、多くの企業で役員を務め、実業派議員として活動。鉄道国有、外資導入の運動などを行った。
昭和１３年７９歳で没。

台湾協会学校創立委員

大岡力（１８６３年～１９１３年）
文久３年長門国生まれ。長兄大岡育造が社長となった中央新聞で副社長を務めて経営と編集を統括し、日清・日露両戦争には従軍記者として赴いた。明治４１年韓国統監府に招かれ、京城日報社長となる。４３年新聞界を辞し、美術骨董界に入った。著書に『地方長官人物評』がある。
大正２年５１歳で没。

大倉喜八郎（１８３７年～１９２８年）
天保８年越後国生まれ。男爵。慶応元年銃砲店を開業、戊辰戦争で新政府軍、幕府軍双方に武器を調達して経済基盤を確立。明治５年貿易商転身を図って海外視察に出、外遊先で岩倉使節団高官の知遇を得る。帰国後、大倉組商会を設立。台湾出兵、西南戦争、日清戦争、日露戦争の軍需品調達・輸送で大倉財閥を築き、大陸投資に力を入れた。台湾協会学校会計監督。また本学と同じ３３年に大倉商業学校（現東京経済大学）を設立している。
昭和３年９２歳で没。



大谷嘉兵衛（１８４４年～１９３３年）
弘化元年伊勢国生まれ。文久２年横浜に出て製茶貿易に従事、明治元年製茶売込商を開業し、茶業組合中央会議長、茶業組合中央会議所会頭を歴任。横浜商業会議所会頭、第七十四国立銀行頭取、横浜貯蓄銀行頭取となるなど横浜財界に重きをなし、台湾貿易㈱社長台湾鉄道創立委員、台湾銀行創立委員・監査役、南満州鉄道創立委員、東洋拓殖会社設立委員などを務め、植民地進出に積極的に関わる。４０年貴族院多額納税議員。
昭和８年９０歳で没。

台湾協会学校創立委員

岡部長職（１８５４年～１９２５年）
安政元年和泉国岸和田藩主の家に生まれる。長職は「ながもと」と読む。明治元年同藩主、２年同藩知事となり、廃藩置県で免官になると、８年から８年間米英両国に留学後、外務省に入る。駐英公使館勤務を経て青木周蔵外務大臣の下で外務次官となるが大津事件で辞任。３０年東京府知事、４１年第２次桂内閣司法大臣。また２３年から貴族院の子爵議員、大正５年から枢密顧問官を務めた。東条内閣文部大臣岡部長景は長男、朝日新聞社長村山長挙は三男。
大正１４年７２歳で没。

奥田義人（１８６０年～１９１７年）
万延元年鳥取藩士の家に生まれる。男爵。東京大学を卒業して官界に入る。衆議院書記官長、拓殖務次官、農商務次官、法制局長官兼恩給局長などを歴任した後、衆議院議員に２選。その後宮中顧問官、貴族院議員となり、第１次山本権兵衛内閣文部大臣、次いで司法大臣に転じた。大正４年東京市長。英吉利法律学校（現中央大学）創立者の１人でもあり、中央大学学長も務めた。東京市長在任中の大正６年５８歳で没。

尾崎行雄（１８５８年～１９５４年）
安政５年相模国生まれ。慶應義塾中退後、新聞記者を経て統計院権少書記官となったが、明治１４年政変で大隈重信に随い下野。立憲改進党創立に参画し、衆議院議員に第１回総選挙以来２５回連続当選した。大隈外務大臣の下で外務省参事官、第１次大隈内閣文部大臣、第２次大隈内閣司法大臣。東京市長在任９年は戦前の最長記録。第１次憲政擁護運動で犬養毅とともに桂首相糾弾の先頭に立ち、「憲政の神様」と呼ばれた。昭和２９年９７歳で没。

台湾協会学校創立委員

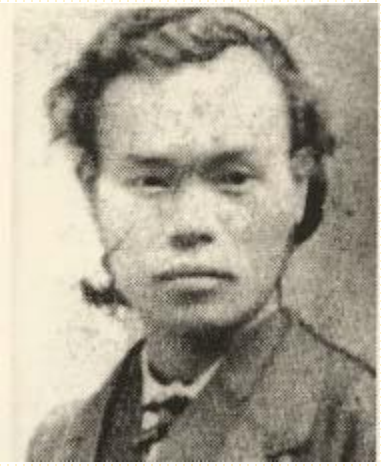
片岡健吉（１８４３年～１９０３年）
天保１４年高知藩士の家に生まれる。板垣退助の片腕として戊辰戦争で活躍し、戦後
は藩の軍政改革にあたる。高知藩権大参事として欧米各国を視察、海軍中佐となるが、征韓論に敗れて下野した板垣を追って辞任。高知で立志社創設に参加して社長に選ばれ、
自由民権運動を推進。帝国議会開設後は自由党土佐派の領袖として衆議院副議長、議長を務める。また同志社社長兼校長に就任するなど、キリスト教教育の発展にも力を注いだ。明治３６年６１歳で没。

加藤正義（１８５４年～１９２３年）
安政元年鳥取藩士の家に生まれる。大阪上等裁判所判事補、兵庫県勧業課長などを経て農商務省に入った後、共同運輸会社へ出向して三菱会社との調停に奔走し、両社が合併して日本郵船会社が誕生すると理事、取締役を経て副社長。また帝国海事協会、日本海員掖済会各理事、東洋拓殖会社設立委員、東京湾築港協会委員などとして海運界に貢献した。この間、東京商業会議所特別議員、東京市会議長にも推され、
大正１２年７０歳で没。

鎌田栄吉（１８５７年～１９３４年）
安政４年紀伊国生まれ。慶応義塾卒業後、和歌山県自修学校長、鹿児島学校教頭、内務省御用掛、大分県中学校長、大分師範学校長兼学務課長などを歴任して明治２７年衆議院議員当選。欧米視察から帰国して３１年慶應義塾塾長となり、３９年貴族院議員に勅選。大正８年第１回国際労働会議に政府代表として派遣され、１１年加藤友三郎内閣文部大臣、昭和２年枢密顧問官。また臨時教育会議委員、帝国教育会会長などを務めた。
昭和９年７８歳で没。

北垣国道（１８３６年～１９１６年）
天保７年但馬国生まれ。男爵。文久３年に平野国臣らの「生野の変」に加わったが失敗。戊辰戦争で鳥取藩兵として戦功を挙げて新政府に入り、弾正台、開拓使、元老院、内務省などに勤務。高知県令、徳島県令などを経て明治１４年から９年半にわたって京都府知事を務め、琵琶湖疎水建設に尽力する。さらに内務次官、北海道庁長官、拓殖務次官などを歴任。３２年貴族院議員４５年枢密顧問官。台湾協会京都支部長も務めた。大正５年８１歳で没。

北川礼弼（１８６１年～１９３０年？）
文久元年越前国生まれ。明治１４年慶應義塾を卒業し、私立英学校教員、海軍省翻訳掛、名古屋金城新報主筆、都新聞客員、朝野新聞主筆、時事新報記者、慶応義塾幹事などを経て３７年千代田生命保険設立に参加し専務、のち副社長。目黒玉川電気鉄道社長、玉川電気鉄道専務、千代田火災保険取締役、千歳火災保険取締役などを歴任した。



栗原亮一（１８５５年～１９１１年）
安政２年鳥羽藩士の家に生まれる。民撰議院設立建白書を支持して小松原英太郎らと『草莽雑誌』を創刊。自由党結成に加わり、板垣退助に随行してヨーロッパを視察。大同団結運動に参加し、愛国公党結成に尽力した。第１回衆議院議員総選挙から１０回当選し、貨幣制度調査会委員、内務大臣秘書官、日本興業銀行設立委員、大蔵省参事官兼監督局長、南満州鉄道創立委員などを歴任したが、明治４２年日糖疑獄に連座して有罪。明治４４年５７歳で没。植民地進出に積極的に関わる。４０年貴族院多額納税議員。
昭和８年９０歳で没。

阪谷芳郎（１８６３年～１９４１年）
文久３年、漢学者阪谷朗廬の四男として備中国に生まれる。子爵。東京大学を卒業、大蔵省に入り、日清戦争中は大本営付として戦時財政運営に当たる。主計局長、大蔵総務長官、大蔵次官などを経て第１次西園寺内閣蔵相、明治４５年東京市長。第１次世界大戦中、連合国経済会議に特派委員長として出席。大正６年貴族院議員。東京市政調査会、学士会、専修大学総長など多数の団体の長を務め、「百会長」と呼ばれた。
昭和１６年７９歳で没。

渋沢栄一（１８４０年～１９３１年）
天保１１年武蔵国生まれ。子爵。一橋慶喜に仕え、慶喜の将軍就任で幕臣となる。パリ万国博覧会使節団の一員として渡欧したが、幕府倒壊で帰国。明治２年から民部省、大蔵省に勤めたが、６年井上馨とともに下野。在官中から設立に関わった第一国立銀行初代頭取となり、ここを拠点に企業の創設・育成に力を入れ、また商法講習所（現一橋大学）、大倉商業学校（現東京経済大学）など実業学校の創設・発展に尽くした。
昭和６年９２歳で没。

志水直（１８４９年～１９２７年）
嘉永２年尾張藩士の家に生まれる。兵部省から陸軍に入り、佐賀の乱、萩の乱、西南戦争に従軍。陸軍大臣秘書官、陸軍省総務局第１課長、大臣官房副官兼参事官などを務めた後、中佐で予備役となるが、日清戦争末期に召集され澎湖島占領戦に参加し大佐。戦後復員して台湾総督府民政局事務官となる。明治３０年名古屋市長。３５年衆議院議員に当選。また台湾協会名古屋支部幹事長、ついで支部長を務めた。
昭和２年７９歳で没。

杉村濬（１８４８年～１９０６年）
嘉永元年陸奥国生まれ。明治時代の外交官。台湾出兵に参加し、横浜毎日新聞勤務を経て明治１３年外務省に入る。京城公使館一等書記官時代、三浦梧楼公使とともに閔妃殺害事件に参加したが免訴となり、２９年台湾総督府事務官、３２年外務省通商局長。３７年駐ブラジル公使となり移民事業に尽力したが、明治３９年任地において５９歳で没。国際連盟事務局事務次長、駐伊大使、駐仏大使などを務めた杉村陽太郎は長男。

住友吉左衛門（１８６４年～１９２６年）
元治元年右大臣徳大寺公純の六男として生まれる。侍従長兼内大臣徳大寺実則、元老西園寺公望の実弟。男爵。明治２５年住友家の養嗣子に迎えられて第１５代当主となり、大阪を本拠地とする住友財閥の東京に対する格を向上させるのに貢献した。住友合資会社社長、貴族院議員。また台湾協会大阪支部長も務めた。
大正１５年６３歳で没。

田口卯吉（１８５５年～１９０５年）
安政２年幕臣の家に生まれる。明治７年大蔵省に入るが１１年退官。『東京経済雑誌』を創刊して経済評論家の地位を確立し、自由貿易論を唱えた。『日本開化小史』、『支那開化小史』を著し、『国史大系』、『群書類従』刊行などで日本史研究にも貢献。東京府会議員、東京市会議員・市参事会員、東京府会副議長などを経て衆議院議員に６回当選。東京株式取引所肝煎、両毛鉄道社長となり、南洋貿易を説くなど実業界で活躍した。明治３８年５１歳で没。

鳴滝幸恭（１８４９年～１９２５年）
嘉永２年仁和寺の寺侍の家に生まれる。会津征討越後口総督府の仁和寺宮嘉彰総督
（後の小松宮彰仁参謀総長）に随って戊辰戦争に従軍。その後、小学校教員、兵庫県警察官吏から兵庫県属となり、同県庶務課長、勧業課長、文書課長、神戸区長などを経て、明治２２年から初代神戸市長を１２年間務める。この間、上水道建設や常設伝染病院開設など、神戸市における保険衛生施設の基盤作りに尽力した。大正１４年７７歳で没。

益田孝（１８４８年～１９３８年）
嘉永元年佐渡奉行所地役人の家に生まれる。男爵。幕府外国方通弁として米国公使
館に勤務し、文久３年幕府遣欧使節に随行。井上馨の薦めで大蔵省に入るが、明治６年井上の下野により退官し、井上と先収会社を設立。井上の政府復帰で同社が解散すると三井物産社長となる。三井銀行再建のため井上の推挙で三井入りして工業化路線を推進した中上川彦次郎の没後、三井の全権を掌握して商業化路線を復活させた。茶人としても著名。昭和１３年９１歳で没。

三浦安（１８２９年～１９１０年）
文政１２年伊予国西条藩士の庶子として生まれ、和歌山藩士の養子となり、同藩の郡奉行、用人、家老代を務める。明治維新後は和歌山藩少参事の後、大蔵省出仕。さらに内務権大丞、内務図書局長、修史館監事、元老院議官などを歴任。明治２３年貴族院議員に勅選され、２６年東京府知事を経て宮中顧問官となる。明治４３年８２歳で没。

水野遵（１８５０年～１９００年）
嘉永３年尾張国生まれ。明治４年に政府から清国留学を、牡丹社事件で台湾視察を命じられ、台湾出兵前から陸軍少佐時代の樺山資紀と行動の多くを共にした。法制局参事官、同書記官、臨時帝国議会事務局書記官、衆議院書記官長などを歴任。日清戦争後、弁理公使として樺山台湾総督らと渡台し、初代台湾総督府民政局長。貴族院議員、台湾銀行創立委員となり、台湾協会幹事長として本学設立に尽力したが、開校３カ月前の明治３３年６月５１歳で没。

箕浦勝人（１８５４年～１９２９年）
安政元年豊後国臼杵藩士の家に生まれる。慶應義塾を卒業して郵便報知新聞に入社。一時宮城師範学校長、神戸商業講習所長を務めたが、報知新聞に戻り社長。大隈重信の立憲改進党結成に参加して、衆議院議員に第１回総選挙から１５回連続当選。農商務省商務局長、逓信次官、衆議院副議長を歴任して第２次大隈内閣逓信大臣となり、憲政会長老の位置を占めたが、松島遊郭疑獄に連座（判決は無罪）して政界を引退した。昭和４年７６歳で没。

三好退蔵（１８４５年～１９０８年）
弘化２年日向国高鍋藩士の家に生まれる。高鍋藩少参事兼大監察、厳原県権参事、伊万里県少参事、大蔵省出仕などを経て司法省に入り、伊藤博文に随行してヨーロッパを視察した後、司法少輔、司法次官、大審院検事長などを歴任。貴族院議員に勅選された後、検事総長として大津事件の処理にあたり、２度目の司法次官、大審院長に就任した。退官後は弁護士となって足尾銅山鉱毒事件の弁護を行い、東京弁護士会長も務めた。
明治４１年６４歳で没。

台湾協会学校創立委員

村上義雄（１８４５年～１９１９年）
弘化２年熊本藩士の家に生まれる。明治７年東京府に出仕して官界に入り、参事院御用掛、同議官補、内務省県治局次長、長野、広島、新潟各県書記官などを経て２６年徳島県知事。２９年から台湾総督府に転じて台中県知事、台北県知事、新竹県知事を歴任した後、本土に戻り、石川県知事を３５年から８年間務め、錦鶏間祗候となる。大正６年に生国魂神社宮司に任ぜられ、大正８年７５歳で没。

元田肇（１８５８年～１９３８年）
安政５年豊後国生まれ。東京大学を卒業、代言人となる。衆議院議員に第１回総選挙
から１６回当選。初期議会では吏党の系譜に属し、伊藤博文の政友会創立に参加して総務委員となる。衆議院副議長、第２次西園寺公望内閣拓殖局総裁、第１次山本権兵衛内閣逓信大臣、原敬内閣で初代鉄道大臣を歴任。清浦奎吾内閣成立時に脱党して政友本党を結成したが、政友会へ復帰し衆議院議長。昭和７年政党人初の枢密顧問官となる。
昭和１３年８１歳で没。

森田茂吉（１８６５年～１９６２年）
慶応元年淡路国生まれ。帝国大学卒業後、内務省に入る。栃木県書記官、文部大臣秘書官、内務大臣秘書官、内務省参事官台湾課長兼台湾総督府事務官、内務省衛生局長、農商務省商工局長などを歴任。退官後は三井財閥に招かれて絹糸紡績社長、中外商業新報（現日本経済新聞）監査役、堺セルロイド専務、大日本セルロイド（現ダイセル化学工業）社長、さらに富士写真フイルムを創立して相談役となった。
昭和３７年９８歳で没。

台湾協会学校創立委員

山口宗義（１８５１年～１９３４年）
嘉永４年松江藩兵学者の家に生まれる。藩の貢進生に選ばれて大学南校（現東京大学）を卒業後、大蔵省に入って主計局歳出第１課長、主計局監督課長などを務め、２９年台湾総督府民政局財務部長となる。翌年退官して日本勧業銀行に入り、次いで日本銀行に転じて理事、監事に就任。また明治３４年から大正元年まで本学会計主任を務めた。学習院長・宮中顧問官山口鋭之助は弟、海軍中将山口多聞は三男。
昭和９年８４歳で没。創立委員会幹事

石塚剛毅（生没年不明）
台湾協会・東洋協会評議員を永年務めた。
明治３３年２月に台湾協会に「植民学校設置建議書」を提出。本学誕生の礎となった。

門田正経（１８６２年～１９２４年）
文久２年伊予国松山藩士の家に生まれる。慶應義塾中退。山陰新聞（現山陰中央新報）主筆の後、郷里で海南新聞（現愛媛新聞）に勤務。大阪毎日新聞社（現毎日新聞大阪本社）創立で同社に入り、東京支局主幹、編集主幹、社長補佐役などを務め、台湾併合論、南洋移民論を唱えた。台湾協会学校創立時より幹事を務めたが、小松原英太郎学長と共に学生の排斥運動などで辞職。しかし初代学友会長の職には死去するまで留まった。大正１３年６３歳で没。

河合弘民（１８７２年～１９１８年）

明治５年愛知県生まれ。水野遵が幹事をしていた愛知県の愛育社から学資の援助を受けて東京帝国大学を卒業し、大学院に進んだ。台湾協会発足時に会報主任。本学創設期には幹事を務め、歴史の教鞭を執った。その後、山形県、静岡県での中学校長を経て、東洋協会専門学校京城分校新設に際して同校幹事。大正４年東京の本校へ転任し、翌年、李朝税制に関する研究で京都帝国大学より文学博士

1852年２月16日、備前国御野郡青江村（現岡山県岡山市青江）に出生。1874（明治7）年に上京して慶應義塾に入学したが、一年足らずで退塾。『曙新聞』の投書で末広鉄腸の知遇を得て、その推薦により『評論新聞』編集長となる。1876年１月、「圧制政府転覆すべきの論」を発表し、新聞紙条例違反で逮捕、禁獄２年を経て1878年６月に出獄、『朝野新聞』に入るも1879年1月には、郷里岡山に帰り『山陽新報』を発行。1880年に花房義質の推薦で外務省御用掛となり、1884年から1887年までベルリン公使館勤務。帰国後は内務省に異動し、内務大臣秘書官、埼玉県知事、内務省警保局長、静岡県知事、長崎県知事、司法次官、内務次官などを歴任。1900年から貴族院議員、同年から1903年まで大阪毎日新聞社の社長を務めた。1908年7月、第二次桂内閣で文部大臣。

２代校長・学長
小松原英太郎

●二代校長小松原校長
大正6年度入学式兼始業式訓話
植民専門学校への改称の理由

……本校の卒業者に対しては、就任の際に於ては何人が其競争者であるかと云へば、東亜同文会の卒業生、或は外国語学校の卒業生、高等商業学校の卒業生等が、本校卒業生の競争者である。……外国語の点に於ては、外国語学校に及ばないかも知れない。数理に精しく、或は簿記其他の事を掌る点に於ては、高等商業の生徒に及ばないかも知れない。支那語を能く使ふ点に於ては、東亜同文会の生徒に、及ばないかも知れないといふことはある。併しながら如何なる困難にも堪へ、如何なる任務を命ぜられても困難を厭はずして其任に就いて、堅忍不抜の精神を以つて、其の事に当るといふ点に於ては、本校は本校の特色を有つて居る。

●設立当初の教員の顔ぶれ

伊藤万太郎　帝国大学理学部卒。ドイツ留学、保険の大家　31歳

奈佐忠行　東京帝国大学理学部卒、ドイツ、フランス留学。地質・地理学の大家。37歳

西川正次　大阪造幣局でポルトガル人から簿記を学ぶ。50歳

河合弘民　帝国大学史学科卒。朝鮮史の第一人者。29歳

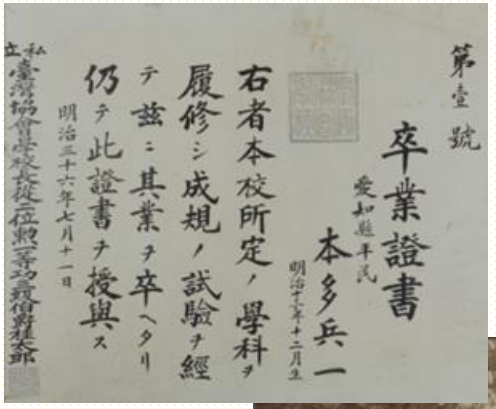
中村進午　帝国大学法学部卒。ドイツ留学。　31歳

松崎蔵之介　帝国大学農学部卒。ドイツ、フランス留学　35歳

元田作之進　米国留学ドクター。日本教区のビショップ。のち立教大学学長

林拱辰　台湾語講師　34歳

（桂太郎　52歳）


第壹號

卒業證書

愛知縣平民

本多兵一

明治十七年十二月生

右者本校所定ノ學科ヲ履修シ成規ノ試驗ヲ經テ茲ニ其業ヲ卒ヘタリ仍テ此證書ヲ授與ス

明治三十六年七月十一日

私立臺灣協會學校長從位勲等功三級伊澤修二郎

第1回卒業式

●台湾協会学校第1回卒業生（45名）　赴任先
（卒業後3年、明治39年9月当時）

Ⅰ海外　計26名

台湾　計７名
台湾総督府通信局２名／台湾総督府彰化庁２名／台湾総督府臨時戸口調査部／台湾総督府総務局外事課／台湾銀行（台北）

韓国　計１名
韓国税関

中国　計12名
横浜正金銀行（鉄嶺）／東文学堂（北京）／領事館（重慶）／西村回漕店（上海）／大倉組（天津支店）３名／小栗商店（上海）／正隆銀行（営口）／台湾銀行（福州）／中国在住就職先不明２名

ロシア　計１名
斉藤商店（ウラジオストク）

米国　計4名
留学　４名

Ⅱ日本国内　計19名

横浜正金銀行／三井洋行／三菱売炭部／日本郵船／大阪商船２名／藤田組／法政大学職員　／兼松商店／江上商店／椎橋商店／近藤商店／軍隊／未定５名／不明

1862（文久2）年、盛岡の南部藩士の家に生まれる。東京外国語学校等を経て1877（明治10）年に札幌農学校に入学、クラーク博士の感化により洗礼を受ける。北海道開拓使勤務ののち、東京大学、次いでジョンズホプキンス大学で学び、そのときキリスト教の一派であるクエーカー教に入信した。
一八九一年に帰国、札幌農学校教授となるが、台湾総督府民政長官であった後藤新平から招かれ台湾に渡り、臨時台湾総督府糖務局長として台湾の糖業近代化を推進した。
1903年に京都帝国大学教授に転出。「植民政策」の論文により京都帝国大学から法学博士の学位を授与される。のち第一高等学校長を経て、東京帝国大学に設けられた植民政策講座の初代教授に就任。国際連盟の発足に伴い事務次長に就任した。
新渡戸は1917年、第二代学長小松原に招かれ、本学第二代学監に就任。学監とは教育研究の責任者。小松原学長は、教育については全面的に新渡戸学監に任せると内外に明言している。1922年まで五年間在職。本学最初の名誉教授になっている。

台湾総督府殖産局長
2代学監
新渡戸稲造

●児玉源太郎台湾総督訓諭　（要約）

（明治35年５月３日）

児玉は、緊迫しつつある対ロシア関係を視野に入れ、台湾総督の立場にありながら、学生の目を広く大陸に向つかけさせようと、「今日諸君が学ばるる所の言葉の遣はれる範囲だけは皆諸君の働き場である」といい、台湾語よりはむしろ北京官話を大いに活用して、「頑固な場所」である大陸清国に赴き、「此の頑固な人を啓発」するため「忍耐に依って気永く彼と交際し、彼の信用を得て、彼の及ばぬ所を啓発して行くといふことが、諸君の御責任であらうと思ふ」と述べた。それには即戦力が必要であり、「意思は確定し……仕事場の位置も確定して居る」台湾協会学校の学生こそ期待される人材であると強調した。

●渋沢栄一学校創立委員訓諭（抜粋）

（明治36年1月）

学問と事業との親和力が欧米諸国に比較しまするとと大に劣て居る。

●新渡戸稲造台湾総督府殖産局長心得

（明治36年6月20日、　寄宿舎にて）

外国人には日本のことを君子国のように言うているが、実は日本人は家に居つて炬燵か何かに首を突込んで居つて、天下丸呑みのようなことを言つて居る……四畳半の君子……其ノ度量をモツト大きくしなければならぬ。……幸に諸君が台湾協会の学校に居られて、皆様台湾に御出でになるかドーカ知らぬが、先づ台湾に容易く御出でにならずとも、御覧になる御方は無論ある。肉眼を以て見ることはないとした所が、心は其処にある。台湾其物が既に我々の海外思想を一つ養ふの非常なる手段となる。……彼処に一つの山がある。アノ山に登って見ると必ず遠くまで見える……、我々心を大きく持ってからに、海外の思想といふものを養ひ、一方には祖先に報ひ、一方には今後の日本人となるべき我々の子孫に対して食ふに困らない道を造ってやらなければならぬ。

卒業生に求められていた資質（海外雄飛の心得）

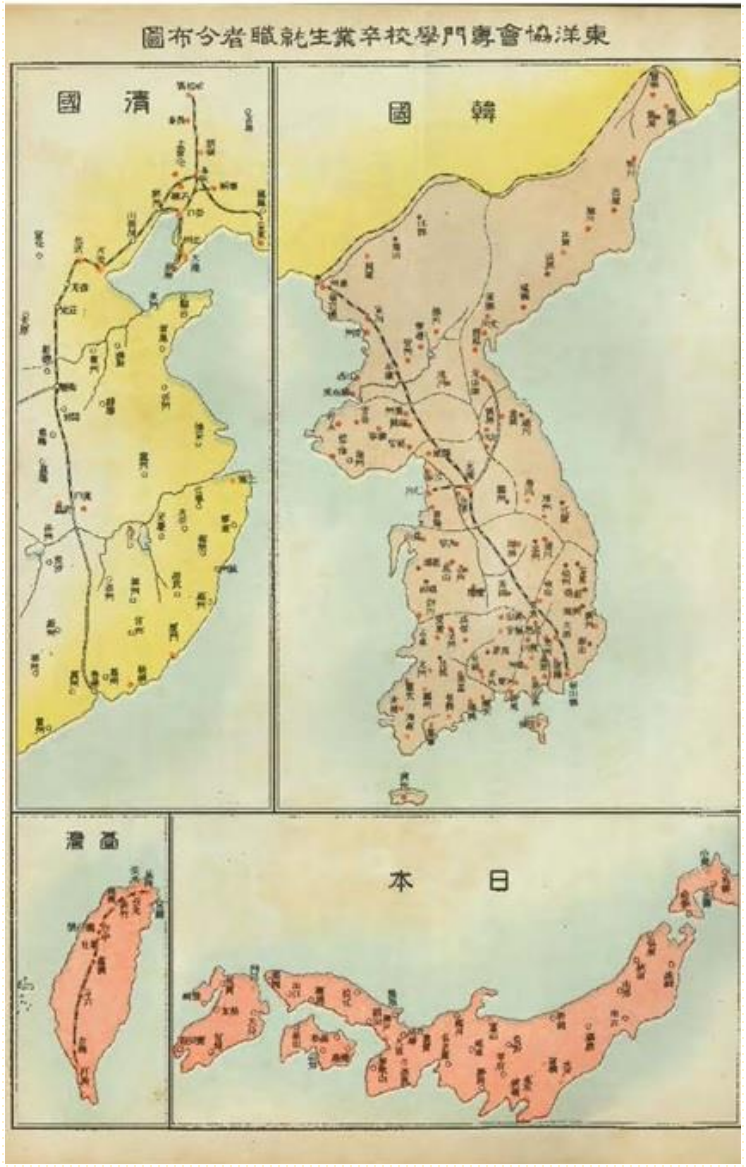
（１）「個として強かれ」。国の力を恃みにせず、日本の海外発展を自らの使命とすること。
（２）国家に対しては、滅私奉公、報いを求めぬこと。
（３）現地の人々に平等に接し、崇高な信念をもって彼らを感化し、敬意と信頼をかち得ること。
（４）日本の植民政策と国際情勢をよく知り、現地の人々に日本の立場を理解させること。
（５）現地の言葉に精通し、現地人と日本人の間に立って、文化の懸け橋となること。
（６）基本的な法律的知識と実務処理能力を身に着け、外地にあっては単独で日常の業務に対応できるようにすること。
（７）身体を鍛錬し、衛生知識を身に着け、過酷な条件のもとで生活できるようにすること。
（８）組織に忠実に仕え、人の手足となって働き、英雄豪傑になろうとしないこと。

●明治大正期の卒業生海外赴任先

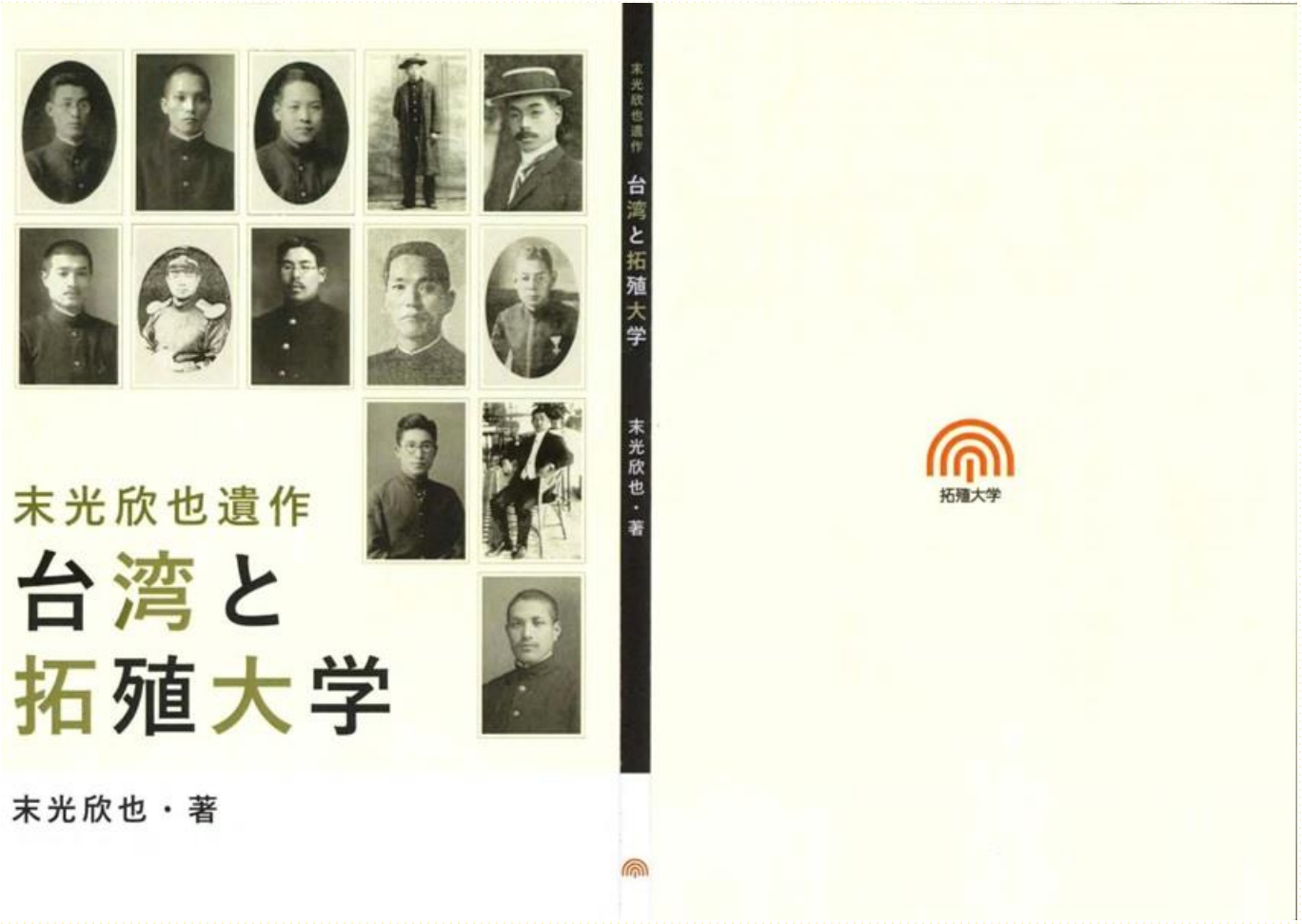
	大正３年	大正８年	大正11年	昭和４年（参考）
台　　湾	92	85	76	75
朝　　鮮	297	236	269	288
満　　洲	—	146	282	197
支　　那	110	83		89
南　　洋	—	17	18	17
シベリヤ	—	8	4	—
その他外国	15	11	14	27
内　　地	207	353	424	908
卒業生総数	798	1167	1386	1929
（物故者）	52	92	142	259

※単位：人

卒業生就職先分布図（明治四一年）



Ⅲ　卒業生の群像



日本統治下の台湾に赴任した卒業生＝378人

台湾に赴任した卒業生の特徴：

（１）台湾に赴任する前に台湾語を身に着けていた。

（２）台湾の風俗習慣に基本的な知識を持っていた。

（３）日本の対外政策における台湾の位置づけを理解していた。

（４）台湾に骨を埋める覚悟を持っていた。→「土着派日本人」

１、「公」の業務：官庁勤務　193人

（１）総督府（本府）、地方官庁、地方支局（税務署、専売局等）に勤務した。

（２）配属先は分散している。台湾全土12庁のすべてに配属されている。

（３）卒業生のほとんどは、赴任直後に地方に転属し、さらに各地を転々とした。

（４）主に現地人と接する基層部門の業務に従事した。

（５）出世コースとは無縁であった。高等官になった卒業生は十指に満たない。

（６）定年まで勤めあげた卒業生は少ない。多くは途中で民間企業に転職した。

（７）巨大な官僚機関の中で「学閥」は意味をなさなかった。

２、「私」の業務：民間企業職員　185人

（１）主な就職先は、台湾銀行（42人）、製糖会社（34人。主要在台製糖会社すべてに学友がいた）、三井物産（6人）、大倉組（6人）　、商船会社（9人。其中郵船会社6人）、組合（15人）、台湾拓殖株式会社（15名）。

（２）勤務地は主に地方（農村地帯を含むほぼ台湾全島）の支社、事務所や工場。

（３）人事異動はほぼ台湾島内に限られる。まれに他の外地（中国福建省、南洋等）に駐在。

桑原政夫（第５期生）

明治41年、台湾総督府通信局員として採用され渡台。渡台後は、殖産局属（判任官）として中南部の嘉義庁で勧業商工事務に従事した。台南州新営郡役所庶務課長、殖産局農務課勤務を経て台南州東石郡守（郡長）、台南市助役。1932年に基隆市長に就任した。終戦後は山口県防府市助役を勤めている。

『学友会報』第４号
（1910年10月）掲載

貝山好美（第11期生）

大正２年、台湾総督府殖産局属（判任官）に採用された。台湾産業組合規則公布に伴い、総督府産業組合の創設事務に従事した。台北庁庶務課を経て大正９年台北州内務部勧業課商工係長に就任。　昭和３年台湾総督府の意向を受けて依願退官し、台湾産業界への転身。台中州青果同業組合常任副組長、台湾青果株式会社監査役に就任。その手腕を買われて台湾の命脈といわれた正米市場組合の幹部となり、台湾米穀移入制限反対運動のリーダーとして強力な指導力を発揮した。戦後は出身地の浦和市議会議員。

●朝鮮金融組合パイオニア理事

1907年5月30日「勅令第33号」によって「地方金融組合規則」が制定発布され、社団法人地方金融組合が発足。同規則は「農民ノ金融ヲ緩和シ、農業ノ発達ヲ企図スル」と謳っている。発足まもなく同年7月15日に本学を卒業した67人のうち18人と既卒者12人の計30人が韓国政府財政顧問部に招聘され、理事として朝鮮各地の朝鮮金融組合の創設に関わった。パイオニア理事と呼ばれる。

本学出身者30名だけで出発した金融組合は、のち規模を大幅に拡大。他大学出身の理事も増加したが、1940年当時の理事の出身大学は、拓殖大122名、早稲田大33名、明治大24名、日本大21名、慶應大15名……と、本学出身者が終始、圧倒的多数を占めた。

●目賀田種太郎韓国財政顧問訓辞
朝鮮金融組合理事へ　明治40年9月

韓国財政顧問
目賀田種太郎

諸君は一介の青年である。世の中の事は知らないであらうが、誠実と正直とは諸君の宝玉である。私は諸君が固有の宝玉を磨かれんことを期待する。又日常に於ける諸君の行動は紳士的でなければならぬ。金融組合の設立に当って一万円の資本を下付するが其の運用の実績は、全く諸君の双肩の上に懸って居る。諸君は熱誠事に当るべきは勿論であるが、斯くても尚組合の基礎を養ふことが出来ない様であれば、次の一万円を出してもいいと思ふ。

重松鷸修（第13期生）
京城分校卒。朝鮮金融組合理事就任後、大正8年3月3日、万歳騒擾事件で暴徒に襲撃され、右足が生涯不自由となったが、むしろ村民との絆が深まったと感じ、この地に骨を埋める覚悟を決めた。「卵から牛へ」のスローガンを掲げ、「会員農家に鶏を飼わせ、生んだ卵を毎日持って来させ、組合がそれをまとめて販売。代金はそれぞれの名義で貯蓄して、牛が買える金額に達したら引き出して牛を購入させる。牛を農耕用に使って生産性を上げる」という副業養鶏を普及させた。著書に『朝鮮農村物語』がある。

●拓殖大学校歌

（一）右手に文化の炬を掲げ　扶桑の岸に声あげて
闇は消えよと呼ぶは誰ぞ　人は醒めよと呼ぶは誰ぞ
ああ輝ける雄渾の　姿ぞ我の精神なる

(二)　雲は焔の色に飛ぶ　南国水はたぎるとも
春光永遠にへだてたる　北地に氷とざすとも
仰いで星を観るところ　拓かで已まじ我が行手

（三）人種の色と地の境　我が立つ前に差別なし
膏雨齊しく湿うるおさば　磽埆やがて花咲かむ
使命は崇し青年の　力あふるる海の外